

北総の子安像塔Ⅱ江戸時代後期（文化↪天保期）の展開について

蔵 由美

はじめに

私が住んでいる八千代市内で一番古い子安観音像の石仏は、米本林照院の文化十一年（一八一四）の子安像塔である。風化で一部剥落しているものの、その洗練された像容に惹かれ、周辺各地の子安像塔を追っているうち、北総全体の近世と近現代、合わせて千基以上の子安像塔と出会うこととなった。

そのうち、子安像塔の像容成立にかかわる江戸時代中期の文化年間以前（一八〇三年以前）の事例九二基については、本誌前号（二〇号）で、「北総の子安像塔の系譜Ⅱ江戸時代中期におけるその出現と成立について」と題して報告し、子安像塔成立萌芽期の事例を図像学的に分析して、その創造と成立、発展の系譜を明らかにした。

今回は主として、江戸時代後期前半一八〇四年（文化元年）から一八四三年（天保十四年）までの子安像塔の一七五基について、その特性と代表的な像容の系譜などの分析結果を報告する。私にとって子安像塔調査の出発点となった林照院の子安観音像誕生の舞台となる時代であり、化政文化の進展によって世俗的で親しみやすく洗練されたデザインの子安像塔が、北総西部にも子安像塔という形で普及していく時期である。

また、前号で中期の子安像塔九二基を報告したあと、旧本埜

村・旧八日市場市・旧大栄町の子安像塔の所在データを入手、それらの地域の中期十七基も補充調査したので、本報告では、前報告データに加えて江戸時代中期一〇九基の一覧表（表5）と、今回新たに集約した後期前半まで一七五基の一覧表（表6）、およびその概要の図表を資料として添付し、江戸中期から後期前半にわたる子安像塔のデータ解析の基礎資料とした。

なお、後期後半一八四四年から一八六七年までの幕末期について、現在一一九基を把握しているが、急激に子安像塔が増える時期であり、未確認のデータも多々あると思われるので、次の機会に報告したいと思う。

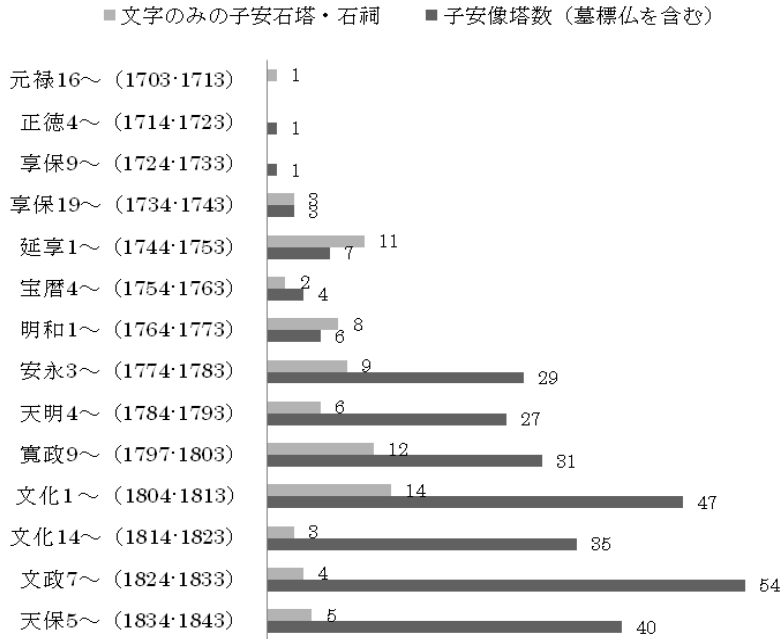
一、江戸中期から後期への数的な推移

図1「北総の子安塔数の推移」に、子安像塔と、文字のみの「子安」石祠石塔の数を十年ごとに集計し、グラフに表した。

なお、「子安像塔」とは、前号の報告にも記したが、主尊の観音または女神像が子供と一体となった像容を持つ石造物全てをさし、月待塔や個人により建立された墓標仏などを含む。また「子安」の銘があっても子を抱かない石仏は除き、銘のある石祠と文字碑は、銘文と所在市町村別集計を報告する。

北総では、享保十八年（一七三三）酒々井町尾上で地域の共

図1. 北総の子安塔数の推移



同祭祀による子安像塔が誕生、その後一七七三年までの四十年間約二〇基の希少な子安像塔が今に残されている。子安像塔の建立が急に増えるのは安永五年(一七七六)ごろからで、その数は十年間に約三十基の割でみられるようになり、後期に入ると、文化・文政・天保には十年間に約四十基のペースに増加する。

文化から天保までのこの時期、北総では、まだ如意輪観音像を刻む十九夜塔が多少ピークを過ぎていたものの、なお盛んに建立されており、子安像塔の造塔数が如意輪観音像塔のそれを上回るの、幕末の十九世紀後半以降からである。(本誌二〇号51ページの表を参照)

子安像を刻まない文字のみの石祠・石塔の建立は、中期の子安像塔に先行し、文化年間まで(一八一七)で続くが、それ以降、文政期に入ると急速に下火となる。この傾向は、江戸後期後半から、青面金剛像に代わって文字のみの石塔となる庚申塔像容の傾向とは対称的である。

表1と2に示したように、子安塔の数を市町村別に集計すると、中期に子安像塔が生みだされた酒々井町・栄町・銚子市などではそれぞれ六〜七基と横ばいであるが、周辺の千葉市・佐倉市・印旛村・佐原市などでは二〜三倍に増加する。

また中期では造塔がないか、あっても二件以内だった印旛沼西端の白井市・八千代市・印西市・船橋市・沼南町においてその数が急増、さらに中期に皆無だった柏市・習志野市・鎌ヶ谷市などでも後期に入って各二〜三基の造塔がみられる。

ただし江戸川べりの浦安市・市川市・流山市などでは後期に入っても子安像塔の建立はみられず、東葛地域内でも、分布に明瞭な境界が存在する。

表3のとおり、子安像塔の銘文による主尊名・目的・造立主体を分類集計すると、中期と後期で「子安観音」・「子安大明神」などの主尊名の数に変化はない。後期で大きく数が減るのは、十五夜講・十九夜講など月待系の塔である。また念仏講など読経主体の宗教行為を示す銘文も後期では減り、一方「女講中」など地域の共同体を示す銘文が主に台座に大きな字で刻まれていくようになる。

表 1. 子安像塔の数

所在地	計	中期	後期	後期の内訳			
				1804 ~13	1814 ~23	1824 ~33	1834 ~43
千葉市	33	9	24	7	6	7	4
佐倉市	24	8	16	2	2	6	6
小見川町	23	10	13	5	4	2	2
印旛村	23	8	15	3	4	5	3
佐原市	17	6	11	5	1	5	0
大栄町	15	10	5	2	3	0	0
銚子市	14	7	7	3	1	1	2
酒々井町	13	7	6	3	2	1	0
印西市	13	2	11	5	1	4	1
栄町	12	6	6	1	0	5	0
船橋市	10	2	8	1	0	2	5
八千代市	10	1	9	0	3	3	3
海上町	9	6	3	1	2	0	0
本埜村	8	3	5	1	0	3	1
山田町	8	0	8	0	4	2	2
成田市	7	7	0				
白井市	6	0	6	1	0	1	4
東庄町	5	3	2	2	0	0	0
沼南町	5	0	5	1	0	4	0
神埼町	4	1	3	1	1	1	0
八日市場市	3	3	0				
柏市	3	0	3	1	0	0	2
習志野市	3	0	3	0	0	1	2
富里市	2	2	0				
野田市	2	2	0				
下総町	2	1	1	0	1	0	0
我孫子市	2	1	1	0	0	1	0
鎌ヶ谷市	2	0	2	0	0	0	2
飯岡町	1	1	0				
蓮沼町	1	1	0				
千潟町	1	1	0				
松尾町	1	1	0				
芝山町	1	0	1	1	0	0	0
四街道市	1	0	1	0	0	0	1
松戸市	1	0	1	1	0	0	0
八街市	0						
子安像塔計	284	109	175	47	35	54	40

表 2. 文字のみの石祠・石塔

所在地	計	中期	後期
千葉市	5	3	2
佐倉市	1	1	0
小見川町	4	3	1
印旛村	0		
佐原市	0		
大栄町	0		
銚子市	0		
酒々井町	1	1	0
印西市	4	4	0
栄町	0		
船橋市	13	6	7
八千代市	15	11	4
海上町	0		
本埜村	1	1	0
旧山田町	0		
成田市	1	0	1
白井市	2	1	1
東庄町	0		
沼南町	0		
神埼町	0		
八日市場市	17	10	7
柏市	0		
習志野市	2	2	0
富里市	3	3	0
野田市	0		
下総町	0		
我孫子市	1	1	0
鎌ヶ谷市	0		
飯岡町	0		
蓮沼町	0		
千潟町	0		
松尾町	0		
芝山町	0		
四街道市	6	3	3
横芝市	1	1	0
八街町	1	1	0
文字石祠等計	78	52	26

表 3. 子安像塔の銘文による主尊名・目的・造立主体など(重複あり)

主な銘文	中期の他の類例	後期の他の類例	中期	後期
子安	子安供養(塔)・子易・子安講中・子安女人中		15	14
子安観音	子育観世音・易産観世音	産寧観音・子易菩薩	10	13
子安大明神	子安尊	南無子安大明神	7	9
(他の主尊名)	子安釈迦佛	子安鬼子母神	1	1
十九夜	十九夜待・十九夜講中・十九夜供養塔		18	14
十五夜	十五夜講中		10	4
(他の月待ち)	十三夜 十七夜	十八夜講	3	1
念仏講	念仏仲間講中・真言講中	念仏講中	4	1
(他の宗教目的)	八日講・読誦法華経・普門品供養	観音霊場の御詠歌	3	2
女講中	善女子・善女(人)・(善)女人講中		15	58
善男女		男女講中	3	2
講中			8	14
(他の組織)		(惣)村中・同行(〇人)・万人講	0	6
(個人名)		施主〇〇・世ハ人(〇〇)	0	4
戒名 (または年月日複数)			4	2

なお、銘文が刻まれる面については、中期ではほとんど正面の左右上部であるが、後期では正面が一一一基、側面が一基、台座が十七基で、正面と側面の両方に記す場合もある。横から見た光背の形状が、蓮弁のようにカーブして側面を持たない曲線的な形から、直線的な厚みをもつ形へと徐々に変化するに連れ、銘も側面に刻むようになる。この傾向は、やがて近代には、墓石と共通する角柱型石材を使用、その前面を削って像容を彫刻し、その多くが銘文を側面と台座に彫る形態になっていく。

また石材も中期の安山岩系の硬質石材から、後期では砂岩・凝灰岩系の軟質石材が多くなる。これにより、加工が容易で、化政期から天保期の特徴である装飾性に富む複雑な像容が彫刻しやすくなる一方、露地におかれた場合、風化崩壊し、その美しい像容は維持できない。現在鑑賞に堪えるのは、祠や覆い屋内に安置され大切にされている石造物に限られている。

今回そのような優品から選んだ写真を載せたが、その背後にはこの時代に造られ、日々失われゆく石仏が多数ある。

表 4. 文字のみの子安塔・石祠の銘文

	中期	後期	計
子安大明神	39	15	54
子安観音	3	1	4
子安観世音		2	2
子安宮	3		3
子易大明神	2	1	3
子安塔	1	2	3
子安明神	2		2
子安神	1	1	2
小安大明神		1	1
子安尊		1	1
子安□・・・・□	1		1
女人中		2	2
	52	26	78

二、後期子安像塔の事例と像容の系譜

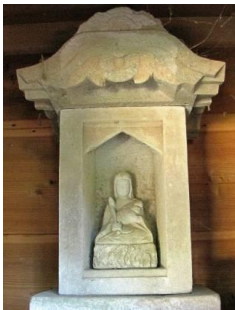
前号で明らかにしたように、子安像塔の中期特有の像容として、①石祠内に像を刻むこと、②胸と肩に二人に子がいる、③右手を頬に当て傾斜する思惟相という三つの特徴がある。子安像塔創出に関わるこれらの中期の特徴点は、表5に○を記入し示したが、後期の動向、また後期に新たに盛隆する像容などについては、事例を紹介しながらこの時代の趨勢を探ってみたい。

① 石祠の中の女神像

子安像塔の初出として酒々井町で生まれたのは、元文元年（一七四〇）、胸と肩に二人に子がいる丸彫の子安像を安置した石祠であった。中期では他に、このような二児を配する子安像を浮き彫りにした石祠が三基、異なる像容の石祠が四基、計八基ある。この二児を配する子安像石祠のルーツを、私は、場所も時代も離れるが、袖ヶ浦市百目木の元禄四年銘の子安石祠と推定している。

後期では、子安像を中に納めた石祠は、中期より数が減るが、ま、次の五基が確認され、印西市宮内鳥見神社の石祠など、美しい姿のまま現在も大切に祀られている。

- ・ No.115 文化二（一八〇五） 千葉市 大宮町 坂尾集会所
- ・ No.117 文化三（一八〇六） 印西市 宮内 鳥見神社



- ・ No.167 文化十三（一八一六） 千葉市 加曾利町



- ・ No.195 文政七（一八二四） 船橋市 高根町 神明社



- ・ No.225 文政十三（一八三〇） 白井市 今井青年館

このうち、No.117は後期で唯一の丸彫り像、No.167とNo.195は浮彫像、No.115は④の千葉市域タイプのも、いずれも美しい像が納められている。

なお、No.167の華麗な宝冠は、No.177の光背型石塔と似た意匠で関連性が予測される。

いずれも主尊名はないが、石祠の形態をとることで子安神像を顕したもので、子安像塔発祥の原点の形態が、江戸時代後期まで維持伝承されている。

② 二児を配するタイプ

胸元のほか、肩にももう一人の子が戯れるほほえましい像容の子安像が、中期に十四基あり、そのうち四基は石祠内、十基は光背型である。これらは印旛沼東岸の酒々井町・佐倉市・本埜村から利根川べりの栄町に分布している。

後期は、天保期に栄町に光背型二例あるのみで、これ以後には伝承されない。

- ・ No. 231 天保二（一八三一） 栄町 布鎌酒直 香取様境内
- ・ No. 238 天保三（一八三二） 栄町 木塚天王前



No. 231は、胸元と肩に2人の子がいる。銘は「女人中」。風化し下部土中に埋没して詳細は不明である。

No. 238は、胸元と肩に子がいるほか、下に太鼓をたたく子が彫られているユニークな石塔である。銘は「十九夜 女人講中」。

そのほか、抱き子のほか、主尊の肩ではなく石塔の下段に上へ登ろうとする子が彫られた子安像塔がある。早川正司氏から場所を御教示いただいた子安塔で、他に類を見ない像容であった。

- ・ No. 129 文化六（二八〇九） 佐原市 篠原新田 水神社



主尊は、正面を向き蓮華を持ち跏坐。銘は「十五夜塔」。この上へ登ろうとする子の動的な表現は、⑤の乳幼児が主尊の膝上に這い上がるようにする後姿の子安像へ発展する可能性がある。

なお、翌年（文化七年）、No. 129と手法から同一の石工の手になると思われる子安像塔が、近隣の篠原八坂神社に建てられているが、こちらは下段の子がいない普通の像容である。

③ 右手を頬に当てた思惟相の子安像

如意輪観音像が頬に当てた思惟相の右手のスタイルをそのままに、左手に子を抱かせた子安像塔が、中期には天明五年までに十四基あるが、その後は途絶えて、後期は次のみである。

- ・ No. 184 文政四（一八二二） 印旛村 造谷 真珠院



銘は「子安塔 講中」で、光輪をもつ。正面向きで顔がやや直立する姿は、この時期の如意輪観音像と共通する。

④半跏方向に傾斜し懐中の子を見る「千葉市域タイプ」像

中期から連続し後期に増加する代表的な像容に、半跏坐の立膝方向に傾斜し懐中の子を見るスタイルがある。中期にも六基あり、そのほとんどは千葉市域に分布するが、文化十年代には八千代市・白井市などにも広がり、またその類型を入れて十六基以上を数える。

この右立ち膝の方向に上体を傾斜し、懐に入れた子を手で押さえるスタイルは、中期ではNo. 35 安永六（一七七八）千葉市大宮町安楽寺の石祠内に刻まれた子安像が初出である。

上体の斜めのラインと半跏した右足のラインが平行している洗練された構図が印象的で、また視線を子の方に向けることにより慈愛に満ちた表現になっている。丸みを帯びた宝髻と被布のようにも見える長い垂髪が優雅である。左手に蓮華や宝珠を持つ姿もある。

典型例は次の九例、その他 No. 115、145、154、206、240、278、279などがこれに類する。

- ・ No. 110 享和四（二八〇四）千葉市 新町天満宮
- ・ No. 111 文化元（一八〇四）千葉市 大宮町日枝神社



- ・ No. 125 文化四（二八〇七）千葉市 武石真藏院の墓地
- ・ No. 130 文化六（二八〇九）白井市 中木戸観音堂



- ・ No. 158 文化十一（二八一四）八千代市 米本 林照院



- ・ No. 165 文化十三（二八一六）下総町大和田コミュニティセンター



- ・ No. 180 文政三（一八二〇） 千葉市 天戸町 福寿院
- ・ No. 272 天保十一（一八四〇） 八千代市 島田台 長唱寺



- ・ No. 273 天保十一（一八四〇） 習志野市屋敷 天津神社前

No. 130 は白井市の子安像塔最古となる事例であり、またNo. 158 は、八千代市の子安観音像の初出事例である。

なお、No. 130 について『白井町石造物調査報告書』では、光背が欠損し元号不明の年銘「六巳十一月」を「大正六年」にしているが、干支と像容から、私の判断で「文化六年」とした。

また天保年間のNo. 271 は彩色の残る美しい像で、同年のNo. 272 と表情や彫りの技術・作風における類似性がある。

⑤ 児が這い上がる姿を動的に表現する子安像

中期にはなく、後期になって造られ愛好された像容として、乳幼児が母の膝上に這い上がるようにする後ろ姿を動的に表現する子安像があり、北総では次の十一基を見ることができ。

- ・ No. 128 文化五（一八〇八） 芝山町 川津場 安養院
- ・ No. 148 文化九（一八一二） 大柴町 伊能公民館

- ・ No. 163 文化十二（一八一五） 神埼町大貫 興福寺



- ・ No. 174 文政元（一八一八） 佐原市 玉造 玉造寺



- ・ No. 239 天保三（一八三二） 銚子市 名洗町 不動尊



No. 128の文化五年芝山町の像は、稚拙な構図と彫りのうえ風化も進み、一見無視してしまいうような石塔であるが、よく見ると、主尊が跼坐した股のところであらう姿の子が両手を伸ばし、正面向きの主尊が左手でその手をつかもうとしている珍しい像容がみてとれる。

No. 148の大栄町の像は、白色の苔が一面に生えて細部が観察しづらいが、子が抱かれたたくて片足を上げて這い上がろうとし、主尊が子に顔を向け両手をさしのべて引き上げようとする愛情ある表現となっている。

このNo. 148の系譜を引く像として、No. 174佐原市玉造寺と、No. 239銚子市名洗町の像が続く。共に腹かけをした幼児が主尊の乳房を求めてその膝に這い上がるうとし、主尊は子の両手を優しくとり、引き上げて乳を含ませようとしている。

またNo. 239は「施主 みつ」と個人の奉納となっており、安産子育て祈願とともに、亡き子が子安観音の御手にいだかれるよう冥福を祈ったのかもしれない。また這い上がるうとする子の姿は、奉納者自身の救いを求める祈りをあらわしているのであらうか。

さらに同様な像容は、天保十年（一八三九）の土浦市真鍋の八坂神社の子安塔にも見ることができ、常総地域に広がる分布も予想される。

このほか、文政元年の佐原市玉造と天保三年銚子市名洗町の子安塔像容に先行する石塔として、No. 163文化十二年神埼町大貫の興福寺の子安塔がある。子安塔としては佐原や銚子の塔より大型で彫りも丁寧であるが、主尊の表情はまだやや硬く、また子との関わりの表現も、銚子市と佐原市の像容のほうが、より主尊の母性と救済を表現していると感じられる。

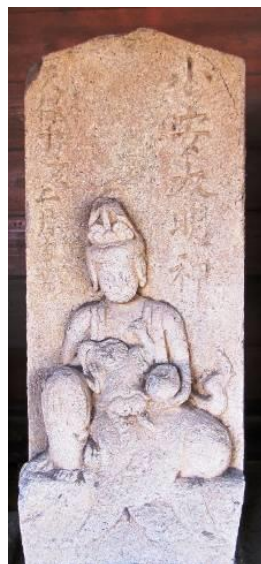
なお、この神埼町大貫の塔の像容成立には、前述したようにNo. 129の文化六年佐原市篠原と、No. 148文化九年大栄町伊能の

像容の影響が強くみられると思う。

また、天保十年代に北総西部の船橋市と鎌ヶ谷市を中心に、膝に這い上がる子を右手で受けて授乳を促す像が六基ある。

中でもNo. 284天保十四年の鎌ヶ谷八幡神社の子安塔は、翻る天衣やかわいらしい子のお尻の表現など、躍動感に満ちて愛らしく、庶民の天保期の文化を象徴する最も華麗な石造彫刻といえよう。

・ No. 263 天保十（一八三九） 船橋市坪井町 子安神社
・ No. 264 天保十（一八三九） 船橋市前貝塚町 八幡神社



・ No. 265 天保十（一八三九） 船橋市宮本五 東光寺



・ No. 276 天保十二（一八四一）船橋市東船橋一 日枝神社



・ No. 277 天保十二（一八四一）船橋市宮本六 薬師堂
 ・ No. 284 天保十四（一八四三）鎌ヶ谷市鎌ヶ谷八幡神社



No. 284の像とほとんど同じ作風の子安塔は、No. 264天保十年船橋市前貝塚町八幡神社とNo. 276天保十二年船橋市東船橋日枝神社で先行して見られ、同一工房の作品とも思われるが、鎌ヶ谷の子安塔が最も完成度が高く、そしてこの特徴は幕末から明治にかけて、船橋市八木が谷や八千代市内の子安塔に受け継がれていく。

なお、同時期の同じ船橋市域のNo. 265天保十年宮本東光寺とNo. 277天保十二年宮本薬師堂の子安塔は、それぞれ作風が異なるが、児が這い上がる後姿をその像容の要素としている。

⑥ 立像の子安像塔

本誌二〇号で中期の報告をした後、大栄町桜田 正等院で、寛延二（一七四九）の子安立像に出会った。（No. 9 左図）



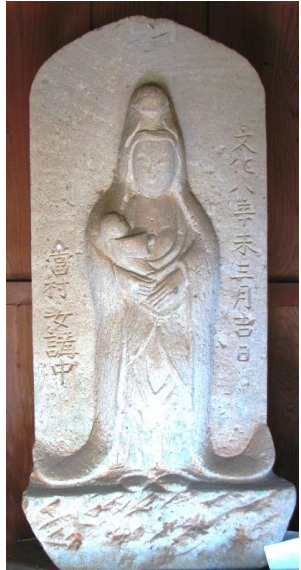
子安像塔の像容がまだ確立しない頃の他に類を見ない石仏で、この像を含め中期では六基の立像があることになる。二十三夜待の本尊が勢至菩薩、十七夜待の本尊が聖観音であることから、これらの立像に子を抱かせたと推定されるが、数も少なく、相互に関連する系譜も追いきく。

後期では文化三年に一基、文化八年（一八一二）に三基、計四基の立像がある。

・ No. 119 文化三（一八〇六）酒々井町 上岩橋 妙楽寺
 ・ No. 138 文化八（一八一二）柏市 戸張正光寺



・ No. 141 文化八（二八二） 佐倉市角来八幡神社



・ No. 142 文化八（二八一） 酒々井町本佐倉 妙見社



No. 119 文化三年の子安像塔は正面向きの立像で、所在地の酒々井町上岩橋の妙楽寺は日蓮宗の寺院である。銘は「子安鬼子母神 女人講中」、天尊が持つ球体は吉祥果であろうか。

日蓮宗の寺院で「子安大明神」銘の子安像塔は、八千代市などにはあるが、「鬼子母神」銘塔は、この子安塔がおそらく初出であろう。

幕末になると嘉永二年（一八四九）八千代市萱田町の日蓮宗寺院長妙寺では、「子安鬼子母神」銘の子安像塔が現れる。

No. 141の佐倉市角来八幡神社の立像は、白衣観音像に子を抱かせた像である。

白衣観音（白処尊菩薩）は、白淨無垢の衣で頭部から全身をおおい、子宝を授け安産を成すとされ、すべての観音の聖母ともされている。十七世紀初頭、中国から白磁像として各地に招来され、隠れキリシタンにもマリア観音として信仰された。

なお同年、近くの酒々井町本佐倉妙見社に建立されたNo. 142の子安立像は、蓮華を持ち作風も異なるが、白衣観音風の像容である。

同じく文化八年のNo. 138 柏市戸張正光寺の子安塔は、角柱の前面を縁取りして彫りくぼめ、中に蓮華を持つ立像を浮彫したもので、他に類型がない。

⑦蓮華を持つ正面向きの子安像

①から⑥まで、後期としては特徴のある、いわば珍しい事例の紹介となつてしまったきらいがある。この時代、一番ありふれた基本的な像容はというと、中期にもましてその類型を示しにくい。

あえて、後期のオーソドックスな像容はというと、天尊が蓮華を持つて半跏坐で正面を向き、授乳している像となる。

蓮華を持つ像は、後期一七五基中、約半数の八一基にみられる。翻る天衣を優雅にまとい、また光輪がつくこともある。

授乳姿も多いが、乳房を見せる表現はNo. 123の文化四年（一八〇七）佐原市森戸の満福寺からで、近代ほど積極的ではない。

これらの特徴点は、近代では、判で押したような定形的な像容となつて個性を失つていくのだが、江戸時代後期では同じ像容でも個性的で円熟した作風となっている。

後期の数あるこの代表的像容の子安像塔の中から、優れた作例を次に紹介する。

・ No. 191 文政六（一八二三） 千葉市 長作町 水神社



・ No. 211 文政十（一八二七） 千葉市 登戸 登渡神社



・ No. 269 天保十（一八三九） 白井市 向台 薬師堂



No. 191は、「子安観世音」の銘。蓮華を持ち半跏坐で子を見る表情に気品がある。袖長の着物に天衣をまとい、リボンのように結ばれた冠帯も優雅で、全体の構図のバランスも優れている。
No. 211は、縞状の斑入りの硬質石材を使用。蓮華を持ち天衣をまとい半跏坐で子を見入る。
No. 269は腕釧をつける。この作風が幕末から近代へ基本となる。

⑧その他特異な子安像塔

後期では、太い光輪を背景に翻る天衣をまとい、小さきままな未敷蓮華を持つて、さらにダルマやガラガラなどの小児用玩具を彫りこんだ子安像塔が増える。中にはデッサン力に欠け未熟で不自然な姿の像もあるが、浮世絵など庶民の化政文化が花咲くこの時期、画一的な像容ばかりとなる近代と違って、石工がデザインやアイデアを競い合い、個性的な石造芸術を造り出していることに注目したい。

1 武装した「子安大明神」像

・ No. 244 天保四（一八三三） 神埼町 植房 宇迦神社



この像は、『房総の石仏百選』で石井保満氏が報告されているが、弓をたばさみ矢束を負う戦さ支度の神功皇后の姿を表し

ているとのこと。

「三韓征伐」の神功皇后を描いた絵馬や社殿彫刻、山車人形などもよく見かけるが、赤子の応神天皇を抱くのは傍らに仕える武内宿禰であり、皇后が子を抱く構図は珍しい。また石造物としては、皇国史観全盛の近代でも北総で類似の石像は見たとがない。

都内に子安八幡神社というのがあるように、神功皇后には安産や育児に御利益があるとされている。この像容は、当時の神主か村の知識人が、記紀神話から考えついたのであろうか。

2 西国観音霊場御詠歌の彫られた子安像塔

- ・ No. 243 天保四（一八三三） 山田町 田部 西雲寺
- ・ No. 260 天保九（一八三八） 山田町 田部 西雲寺



山田町田部の西雲寺のNo.243は、顔は横向きで蓮華を持ち跏坐する像で、子安観音の光背には「十六番」と銘があり、流麗な崩し字で歌が彫られている。

また同所のNo.260の子安観音像の一部剥落した光背には「□奈良南圓堂」の銘と歌の一部の文字が残っている。ともに石塔から銘文すべてを読み解くことはできないが、その断片から西国観音霊場の各札所のご詠歌*と推測された。

*第十六番 音羽山清水寺「松風や音羽の滝の清水をむすぶ心は涼しかるらん」、第九番 興福寺南円堂「春の日は南円堂にかがやきて三笠の山に晴るるうすぐも」

なお、No.260の半跏坐で授乳の子を見入り乳房あらわす像容と作風は、No.223文政十三（一八三〇）本埜村の子安塔と同じである。

3 角柱文字碑型の子安像塔

- ・ No. 209 文政十（一八二七） 栄町 請方皇大神社



- ・ No. 219 文政十三（一八三〇） 沼南町 手賀明王院跡
- ・ No. 253 天保六（一八三五） 習志野市津田沼谷津東福寺



右の三基は、角柱の上部に火灯窓状に彫りくぼめ、子安像を浮彫し、銘を刻んだ石塔である。

No.209は「奉待十九夜」、No.219は「子安塔」（「塔」は異体字）、No.253は「子安大明神」と大書し、文字碑の性格が強い。

4 抽象化された美へ

最後に、一般に裝飾華美になる傾向の中で、シンメトリーで抽象化されたデザインを追求した作例を紹介する。

・No. 204 文政九（一八二六）沼南町 布瀬 宝寿院



・No. 242 天保四（一八三三）沼南町 金山 円林寺



No. 204 は光輪が天衣のように大きく8の字を描くのが印象的である。

No. 242 はさらに身にまとうものを単純化し、太い光輪を際立たせている。松戸市初出となるNo. 248 ニツ木蘇羽鷹神社も、風化剥落が著しく細部は比較できないが、このNo. 242 に類似する。

おわりに

江戸時代の彫刻と言えば、木彫では、江戸中期で五百羅漢像を作った松雲元慶、遊行僧の円空、後期では「波の伊八」こと武志伊八郎信由などの作品がある。石造彫刻では、寛政四年（一

七九二）銘のある埼玉県秩父の金昌寺「慈母観音」像が、日本美術史上の傑作と思うのだが、江戸時代の彫像は、浮世絵などの絵画に比べ、その芸術的価値が高く評価されることはほとんどなかった。

子安像塔は、江戸時代の庶民に最も身近な芸術の一つである。私は、北総という一地域の子安像塔を調べていくうち、この具象的なテーマは、神仏の聖性と人間性、特に母性を形として表現するということであり、芸術を生み出す普遍的な動機なのではないかと思うようになった。

今回の報告では、江戸後期の多数の作例から、八千代市林照院と長唱寺の穏やかで優しい像、また船橋市域や鎌ヶ谷八幡神社の躍動感ある像などの図像的系譜を明らかにできたかと思う。美術的に価値がある作品は、作者の才能と技術に負うだけでなく、それに至る歴史的プロセスがある。いずれも作者を特定できないが、ムラの女性たちの信仰と発意、そして作品に対する評価が、共有財産としての優品を生み出していくのであろう。

最後に房総石造文化財研究会で現在調査中の旧山田町と八日市場市の速報データを提供くださった本会石田年子会員、また石造文化財調査データベース（*1）を構築されている方々に謝意を表します。

*参考資料（本誌二〇号に掲載したものは省略する）

1 電子データ「下総地方中部8市町村（習志野市・佐倉市・成田市・四街道市・酒々井町・八街町・印旛村・本埜村）石造文化財データベース2011年版」白井豊・吉村光敏・吉田文夫・西岡宣夫

2 「概要 町内の石造物一覧」『大栄町史 民俗編』一九九八大栄町史編さん委員会編